

伊 太 利 と こ ろ

(三)

瀧 川 規 一

〔ボチチエリの習作時代〕 ボチチエリは本名をアレキサンドロ・デイ・フィリツペビ (Alessandro dei Filipepi) と云ふ。通稱サンドロ・ボチチエリ (Sandro Botticelli) と呼ばれてゐるアレキサンドロを略してサンドロと縮めたことは容易に判る。然しボチチエリの語義は袋の意である。これが畫家の通稱となつたことについては二説がある。一説には長兄が金細工商であり商牌に袋の圖があつたので長兄は袋のボチチエリで通つてゐた。さもなければビール腹をしてゐたのでさう呼んだ。その通り名を末弟が頂戴した。

斯くて時人は末弟のサンドロをもボチチエリと呼びなすにつれて遂には自らもサンドロ・ボチチエリと署名するやうになつたのだと云ふの

である。一説にはサンドロは學校に通はされたが所謂讀み書き算術が嫌ひであつたのでボチチエリと云ふ金細工商に奉公に遣られた。世人は主人の名を以て彼を呼ぶに至つたと云ふのである。第一の説を以て今日ではボチチエリの由來を説く人が多い。

ボチチエリの父はフ市の郊外に群つてゐた製革業の一人であり富裕であつたので諸處に土地家屋を所有し子供及び孫の大家族をもつてゐたがこの家族は市内に住んでゐた。ボチチエリはその四男で末子であつた。既に述べた如く畫伯が生れた時はメヂチ (Medici) 家の祖コシモ (Cosimo 一三八九—一四六四) の時代でありコシモの孫に當るロレンツォ (Lorenzo 一四四八—九二) に畫伯は寵をうけた。この時はフ市の

黃金時代であり文藝復興の最盛期であつた。ヒュ머니スト (humanist) と總稱せられる哲學者詩人等が藝術家等と共にメチチ家の庇護を受け古典に對する熱心なる研究を試み、自然の美を愛しダンテ研究の復活すると共にブレート (Pietro) の哲學と基督教の教理との調和を計つた時代であつた。またドミニク派の修道僧サヴォナローラの熱烈なる説教をゾオモで聽いた時代であつた。ボチチエリの藝術は自らこれ等の影響を受けないでは居られなかつた。

讀み書き算術の嫌ひなボチチエリは父に願つてカルミ派の畫僧フラ・フイリツポ (Fra Filippo) に弟子入りをする事になつた。生來好きな畫道に就くことになつた彼は師の畫僧の下に孜孜として業にいそしんだ。師も亦弟子の精進を見て特に指導の勞を惜まなかつた。師弟の情誼が厚く師が弟子の天才を夙に認めてゐたことは師の没後その嗣子がフ市に歸つて父の弟子に弟子入りをなした事によつて察し得られる。フラ・フイリツポの影響下にあつたボチチエ

リの第一期の畫にはセチニャノ (Setignano) と云ふ田舎町の附近で丘陵の路傍に建つてゐるマドンナ・デラ・ヴァネラ (Madonna della Vannella) と云ふ小祠の壁畫のあるのが近頃になつて發見された。畫は大分傷んでゐるやうではあるが、ボチチエリの特徴がよく現はれてゐると云はれてゐる。聖母のうなだれ氣味の頭とその優しく愁を帶びた表情とはその特徴である。この小祠はその附近の丘陵にある葡萄畑や果樹園に害や暴風雨の起らぬやうにとマドンナの保護を祈願する爲めに百姓達の建てたものである。ルーヴルにある「サイプレスの樹及び薔薇の叢を背景にしたマドンナと基督及び小供の聖ヨハネ」の繪は矢張りこの時期のものであるとされてゐる。然しこの繪については異説があるボチチエリの弟子の筆になつたものではあるまいかと疑はれてゐる。

一四六七年には師の畫僧がスポレト (Spoleto) にある伽藍の圓天井の裝飾として繪を描く爲めにフ市を去つた。ボチチエリは師が去つた

後は金細工商兼畫家であつたアントニオ・バラ
イウオロ (Antonio Pollaiuolo) 及びその弟のピ
エロ (Piero) 兩畫伯の影響を受けるやうになつ
た。その影響を表はした繪には倫敦國立美術館
(National Gallery) にある「東方學者の基督禮
讃」の繪がある。聖母と小供とは全くフラ・フ
イリツポの畫風に描かれてゐるが、見物人の群
や馬やお伴の小姓に至つてはポライウオロの影
響を示してゐる。恐らく新しき師の下に助手と
してボチチエリは働いてゐたのではあるまいか
と想像されてゐる。

新師匠の影響の下に一四七〇年頃に描かれた
有名なフォルテツツア (Fortezza) の繪がある
「堅忍」若くは單に「力」と譯されて居るもので
あつて今日ウフィツチ美術館で見られる。半武
装の若き婦人が雜色の大理石の玉座に坐し兩手
で劍の柄をなぶつてゐる繪である。この繪はメ
ルカタンチア (Mercatanzia) と稱せられた商法
裁判所の法廷の裝飾の爲めに描かれた七徳を象
徴する繪のうちの一枚である。最初の六徳はポ

ライウオロ兄弟の筆になるものであり最後の一
徳をボチチエリが描いたものである。従つてボ
チチエリは師が描いた六つの徳の繪に大體は倣
つて描いた。人物の姿は彫刻像の如くになして
薄色で繡の施した衣装を着け大理石の雜色であ
る點は六つの徳の繪と同じ趣向をとつた。これ
を以て「堅忍」の繪がボチチエリの筆でないことさ
へ云ふ評家がある。然し婦人の姿勢と表情とは
全くボチチエリを表はすに充分である。ボチチ
エリ特有の頭の傾け方をして居り、稍面簾れの
思案顔のうちに堅き決意をほめかし勇氣と忍
耐とを暗示してゐる。彼女が戦はんとする戦は
今日始まるのでもなくさりとて昨日始まつたも
のでもない。落ちんとする刀の柄を指でなぶつ
てゐるが戦陣の喇叭の音をきくや否や空想の夢
を破つて手は柄を確かと握りしめるであらう」
と云ふ印象を與へられたのはラスキンである。
この時期に描かれたもので印象を強く觀者に
與へる繪がもう一つウフィツチ美術館にある。
それは「ジュヂス (Judith) の歸り」と題するも

のとこれに随伴した「ホロファネス (Holofernes) の陣没」の繪である。ジュデスは紀元前一二九年頃に居つた小アジアのベスリア (Bethulia) 城下の娘である。アッシリアの國王はゼルサレムを奪略の目的で軍を進めその一將軍ホロファネスはベスリアの町を包圍した。ジュデスは自己の町を救出す目的を以てホロファネスの陣營に近づき内通の目的で來た由を述べて以て陣内に入るを許された。その美貌によつて兵士等を魅し遂に將軍自らをも魅了した。將軍は宴を開いてジュデスに侍せしめたが彼女は將軍が酒に酔つて熟睡してゐる間にその首級を刎ねこれを安全にベスリアに持ち歸つた。日本武尊の熊襲征伐そのまゝの話である。これは舊譯聖書のアポクリファにある物語の筋である。ポチチエリの繪を見るにジュデスは右手に劍を提げ左手にオリヅの樹枝をもち丘陵の上を足早に輕き歩みを續けてゐる。向ふに見えるのはベスリアの町である。お伴に一人の侍女が頭の上に衣に半ば包んだホロファネス將軍の首級をかつい

で居り片手には油と葡萄酒を入れる德利を提げてゐる。兩人の衣の端は吹く風のために身體にまつはりつゝ翩々としてゐる。美容をもつて將軍を魅了したと云はるるジュデスの顔には男優りの賢な處があり今や目的を達し得た大成功の勇ましさが顔と動作とに現はれてゐる。ポチチエリの描く女性はいづれもまがふ方なき特別の表情をもつてゐる。頸は長く頬骨が高く口元に力がこめられて居り、眼は悲調を帯びてゐる。娘のおぼこさが少しもない。年増美人の型である。他の一枚の繪は將軍ホロファネスの陣營内に於て將軍の寢所の帷が開かれ部下の將士が將軍の首無き屍體を見て驚愕と悲歎にくれてゐる光景である。この二枚の繪によつて知られるが如く筆者はポライウオロの影響をうけて人體の形及び構造を現實に近く描かんことを企てたことが判る。

「ポチチエリとロレンツォ及び弟デウリアノ」
一四六九年ピエロ・イル・ゴットソ (Piero il Gottoso) が死んで其子ロレンツォ (Lorenzo)

は猶二十歳の青年であつたが父祖の後を承けて市長の職に就いた。ロレンツォはその弟デウリアノ(Guliano)と共にフロレンス市の凡ゆる學者の下に最高の教育を受けた。名望地位が然らしめたと云へばそれまでであるがロレンツォの場合に於ては子弟教育の効果が小供のよい頭腦と相俟つて充分に現はれたのである。斯くして後世にまでマゲニフィコ(Magnifico)の渾名を本名に附加して諸はるる程にフロレンス市の市長ロレンツォをして市の黄金時代を現出せしめたのである。彼は祖父のコシモ(Cosimo)に劣らず文學藝術を奨励し庇護した。青年詩人畫家及學者等は自らフ市に集つた。マルシリオ・フイチコ(Marsilio Ficino 一四三三—九九)及びその他のプラト派の哲學者等は相集つてフ市の或るバラッツォ即ち宮殿に會合を催しプラトの誕生日にはカレギ(Careggi)にある分家のメデチ家の別荘の庭園でその祝賀會を催した。ロレンツォはこれ等の學者藝術家を庇護するばかりでなく自らも彼等に劣らぬ程の詩作をなし

た。斯くしてロレンツォの下に建築家彫刻家畫家及び金細工師が集つた。ロレンツォはまた公共の建築物を建てたり藝術品を作る爲めには出費を惜まなかつた。

フラ・フィリッポが既にメデチ家の寵を受けてゐたがその弟子であるボチチエリはまたロレンツォに才を認められ一四七四年の一月にはその命を受けてサンタ・マリア・マジヨン(Santa Maria Maggiore)の教會の爲めに「聖セバスチアンの像」を描いた。これは太き樹の幹に縛られ裸體に矢を射られてゐる繪であるが聖セバスチアンの畫題としてはありふれた構想である。聖セバスチアン(二五五—二八八)はゴール(Gaul)のナルボンヌ(Narbonne)に生れた青年であつて羅馬に行き軍隊に加つた。然し彼は基督教信者であるとの嫌疑を受け皇帝デオクレシアン(Diocletian)の命により弓術隊の矢によつて射殺された。弓術隊の兵士等は彼等の射た矢にあたつて死んだものと思ひセバスチアンの屍體を棄てゐいたが、イレネ(Irene)と云ふ基

基督教信者の婦人はこれを介抱して彼を蘇生せしめた。セバスチアンは後に皇帝に諫言を呈したので皇帝は再び彼を棒で毆打せしめて殺した然るにまたファウスチナ (Faustina) と云ふ婦人の基督教信者が彼の屍體を見出し墓窖に埋葬した。今日では其地點に聖セバスチアンのバシリカ (Basilica) が建立されてゐる。矢で射殺されたこの殉教者は多くの畫家の畫題となつたものである。アントニオ・ポライウオロも亦一四七五年にこれを描き今日倫敦の國立美術館にて見られる有名な作品を遺してゐる。今ボチチェリの筆になるものは伯林で見ることが出来るのであるが、構想はありふれてゐてもセバスチアンの顔の平靜と背景にある嶮しき岩と遠方には海が見え海岸にいくつかの高塔が見える美しき風景は人目を惹くのである。

ボチチェリは一四七四年にはピサ (Pisa) に行つたがその暮には描く繪が意に滿たず中止してその年の暮にフ市に歸つた。フ市では翌年の一月にピアツァ・ヂ・サンタ・クロチ (Piazza di

Santa Croce) で有名な騎士の武藝の闘技が催された。ボチチェリはその時の旗を描くやうに命じられた。ロレンツォの弟デウリアノは背高き美貌の青年で全フ市の寵兒であつたが騎士の武藝に秀でて居つた。この仕合には競技者の一人となつて入場した。身には眞珠とルビーとを縫ひつけた廻はし外套をつけ輝く白銀の甲冑に身を固め、刺繡と寶石とによつて飾られた飾を着けた駿馬に跨つてゐる。前方に押立てゝゐる旗には智慧と戦争の女神であるパラス (Pallas) の大きな姿が描かれてゐる。この女神は黄金の胸衣と純白の外套を着て燃えてゐるオリヴの樹枝の上に立つて居る。女神の頭上には旗の青地のの上に日の出が描かれてゐる。女神は右手に槍を持ち左手には楯をもつてゐる。楯には希臘の三怪女ゴルゴンス (Gorgons) のうちの一女神なるメヅユサ (Medusa) の像がある。この怪女神は長髪悉く蛇でありこれを目睹する人間は忽に石に化すると云はれる程に恐ろしい女神である。パラスの背後には愛の神が黄金の繩でオリ

ヅの樹の幹に縛られてゐる。これが仕合の當日
デウリアノが闘技場に乘込んだ時の装束姿であ
る。闘技場にはデウリアノの愛人にしてフ市第
一の美人と謠はれたシモネッタ・ヴェスプッチ
(Simonetta Vespucci) が見物に来て居る。彼
女の目前で晴れの闘技を試みるデウリアノはど
うしても今日の闘技の相手に打ち勝たねばなら
なかつた。競争者に愛人をあめ／＼渡すことは
武人としてどうしても出来なかつた。期待に背
かず彼は首尾よく多くの相手を打破り觀衆から
場内破れんばかりの喝采をうけて愛人をつれ去
つたのである。デウリアノの愛人シモネッタは
ゼノア生れの美しき娘であつて芳紀十五歳にし
てメヂチ家の忠勤な黨人マルコ・ヴェスプッチ
(Marco Vespucci) の花嫁となつた。然し不幸
にもデウリアノのロマンチックな想思の目的物
となつた。ロレンツォはこの友人の妻を眞面目
な愛情を以て述べて居る。詩人ポリチアノ(Po-
liziano)をはじめロレンツォの周圍に集つた多
くの詩人等も亦彼女の徳と魅力とをたゞえてゐ

る。「彼女には多くの天賦の才徳が備つてゐる。
そのうちにも彼女の態度が最も麗はしく最も人
を惹きつけるのである。だから彼女と親み得た
ものは悉く彼女に愛されて居ると思つた。非常
に澤山な人が彼女を愛してゐたがさりとて互に
嫉妬を感じたことがなかつた。非常に澤山な婦
人が彼女を讃めたがさりとて美望の感を惹きな
かつた。そんなことは殆どあり得べからざるや
うであるが而かもさうであつた」とはポリチア
ノが彼女を稱讃した言である。

デウリアノが入場の際持つてゐた旗は今日遺
つてゐない。また旗に描かれた繪の筆者が誰な
るか。記録されてゐない。然し諸種の他の記事
から恐らくポチチエリの描いたものであると推
論して誤がないやうである。さてこの兩人の斯
くも華やかな生活にも悲惨なる運命が訪れる日
が來た。美人のシモネッタはながびく肺患の爲
めに遂に仆れた。彼女がオニサンチ(Ognis-
santi)の墓に葬られる時はシモネッタの顔はど
うした場合の慣習とは異つて布で蔽はず露出し

たまま墓に運ばれた。生前に美しくあつた顔が死んで益美しくなつたから人々にこれを見せる爲めであつたと云はれた。澤山な人の群は悼みの涙を流して彼女の葬列に加つた。メヂチ家に集つた凡ての詩人は彼女の悲しき運命を詩歌を作つて悲しみ悼んだ。プルチ (Pulci) 及びボリチアノ (Poliziano) 兩詩人は拉典語で哀悼の詩と短い詩形のエピグラム (epigram) とを作りロレンツォも亦ソネットを作つて彼女を記念した。

新著紹介

○地理論叢第一輯

京都帝國大學文學部地理學教室

古今書院發行 定價二圓五十錢

本書は京大地理學教室の研究報告で、年四回發刊される豫定である、石橋教授の地理學概、岩根氏の徳川時代地誌の撰述内田氏の阿波の農業地理、織田氏の龜岡盆地、小牧氏の日本の聚落の高距限度、塚本氏の京都市域の地理、別枝氏的美濃の輪中、村松氏の本邦の村落形態、米倉氏の條里、渡邊氏の男鹿半島の地誌十篇を收録し菊版四一六頁に達する、四十

五字詰十五行であるから、普通の雜誌とちがつて紙面にゆとりがあつて見心地がよい、しかし引用文などは、これ以上六號にしてつめた方が却つて効果が多いと考へる、最後に本誌の定價であるが時節柄でもあり、且學問普及の上からみて、せめてこの半額位にしられたならば結構と存じ、切に當局の御一考を乞ふ。(藤田)

○大滿洲國詳圖

小林又七著作 兵用圖書株式會社發行

小林又七著作といふこの詳圖は、二百萬分の一の美はしい着色六度刷であつて、權威ある新しい地圖といふべきであらう東亞百萬分一興地圖を原本として新しく増訂したもので、時局を理會するに好都合である。掛圖とした方の定價一圓三十錢である。折本ならば七十錢だといふ。大阪和樂路屋發行の新滿洲國大地圖はこの詳圖によつて、やゝ簡略化されたものであるが、この方は知友齋藤巳代治氏の刪削である、民間の著作として見るべきものゝ一つである、新しい滿洲國の刻圖として同時に同じ形のものが、東、西に二つ出たことを報告しておく。(藤田)

雜報

○大阪市外京阪沿線守口より發掘せられたる半

化石に就いて

大阪府北河内郡守口町大字土居^{ドキ}地内に